

# 高安月郊と高安家の系譜

## 一 高安病院について

高安病院は、明治二十三年（一八九〇）三月、高安月郊の父である高安道純（杏陰）が大坂土佐堀に開院し、緒方洪庵の子惟準が創設した緒方病院と双璧とも称された私立病院である<sup>①</sup>。近世以来、代々医業を営んできた高安家にあって、道純の長男純太郎が生後八か月で早世した（元治元年（一八六四）没）ため、月郊は嫡男として期待をかけられたが、医者になることを拒んで文学の道に走り、明治二十七年（一八九四）に自ら廃嫡を求めて家を出た。そんな月郊の代わりに家業を継いだのが、ヨーロッパに留学して医学を修め外科手術を学んだ三男の道成であった。

道成は、明治三十九年（一九〇六）四月に高安病院を土佐堀から道修町へ新築移転し、この頃には「京阪地方に於て高安病院なる名を記憶せざるものは、垂髫の間に於てさへ無き」（『諸家と其作品』『文庫』明治三十九年八月）<sup>②</sup>といわれるほどに声価を高めたが、同年十一月十一日に道純が七十歳で鬼籍に入る。その後も

## 後藤隆基

道成院長の下、ドイツ留学から帰国した末弟の六郎（吸江）が内科を担当し、大阪でも指折りの私立病院として知られることとなる。また明治四十四年（一九一〇）十一月十一日に世を去った川上音二郎は、大阪北浜に建設した帝国座で臨終を迎える直前まで高安病院に入院していた<sup>③</sup>。明治三十六年（一九〇三）に音二郎は月郊の「江戸城明渡」を東京で初演しているが、その末期にこうした関わりが生じるとは、いかなる因縁であったか。

月郊の出自や幼年時の記憶については、自伝的随筆「明治大正時代を経て」（『東西文芸評伝』所収、春陽堂、昭和四年六月）や『高安乃里』（書物展望社、昭和九年六月）などに詳述され、先学の伝記研究もそれらに多くを負っている。月郊の家系、医家としての歴史に関する考証は、高安彰「高安家について」（『船場紀要』第七号、船場の会、昭和五十三年二月）および永見克也「高安家の代々」（同前）の二編があり、中山沃『緒方惟準伝——緒方家の人々とその周辺——』（思文閣出版、平成二十四年三月）は緒方家の周辺を描出する中で、高安道純と道成、高安病院の実相に迫っている（七一三―七一七頁）。ただし高安彰、永見克也、

中山沃各氏は医学史の文脈からアプローチしているため、月郊についての記述は僅かで、月郊との関連をふまえた議論が必要となる。

中川沃は前掲書で、高安病院の職員が組織していた杏陰会発行の雑誌『杏陰会誌』第三号（昭和五年十一月）を古書店で入手したことで高安道純らについての調査が進展したと述べているが、今回、月郊のご遺族より『杏陰会誌』第二号（大正八年十一月）及び第三号や高安家に伝わる系図などの閲覧を賜った。本稿では先学の業績を整理してその援けを借りながら、高安家所蔵資料の一部を翻刻・紹介し、高安家の系譜をたどってみたい。

## 二 高安家代々

高安家の系譜は、前掲の高安彰「高安家について」と永見克也「高安家の代々」によって、大要を知ることができる。高安彰氏は、月郊の弟で高安病院を継いだ道成の長男。医家としての高安家の直系にあたる。氏は同家に「現存する系図」を参照して「二百六十余年前（正徳年間高安理平）から、代々船場で医業に従事した」と、道純とその子らの代について概括し、右の論考発表時点までの家系図も併載している。永見克也は、近世大坂の医師番付や高安家の菩提寺であった禅林寺の過去帳等に基づく中野操編著『医家名鑑』解説編（前田書店、昭和四十五年十月）の考証から、文化年間（一八〇四～一八）以降の高安家当主を道純の代まで記している。永見はまた明治四十一年（一九〇八）秋の道純三回忌に関係者へ配布された『杏影集』なる小冊子をほぼ全文引用

し、系譜を繙いているが、巻末に付された道成の「杏影集の後に跋す」によれば、これは道純が遺した「古き書篋を探りて壮時よりの肖像折々の咏草詩章などを得たれば其散乱を防ぐ為め取纏め」る目的でつくられ、月郊が編纂の労をとったものであった。

『杏影集』については『杏陰会誌』第二号所載の弱法師述「抑是録【一】」に「元来高安家の記録のまとまつたものとしては、会員諸君が熟知せらる、杏景集（ウヰ）より外にない。そして其種本といふべきは、嘗て道修町旧宅の頃仏壇の抽斗しの内にあつた杏山翁自筆の系図書並に過去帳（是は恐らく常山杏山杏陰自筆と思ふ）丈であつた。従て是が無論不十分であることは、自分が幼き頃から聞いて居た杏山弟謙吉の事すら漏れて居るのも明かである」との記述が見える。この「弱法師」なる人物は、記事中に「杏陰翁逝去当時自分は海外にあつて、やうく数年を経てから帰朝した」云々とあり、また高安道成を「家兄」と記していることに鑑みて、末弟の吸江（六郎）<sup>4</sup>と思しい。そして右の引用にある「杏山翁自筆の系図書並に過去帳」は、次節以降で紹介する『系図書及御先祖戒名』（高安家蔵）の原本と考えられる。さらなる資料調査を志した吸江は、大正二年（一九一三）に「道修町土蔵中にあつた反古」の中から「杏陰翁の自筆」の新資料を発見したというのだが、紙幅の都合上、本稿では割愛し、いずれ検討の機会を設けたい。以下、前掲の諸文献に拠りながら、現在知りうる高安家の代々を概括していくこととする。

『杏影集』（高安家蔵）によれば、同家の「遠祖は河内国高安郡一森長者なり。系図其外たびたびの火災に焼失せて詳ならず。中興の祖、理平光近大阪天満に住みて、針術導引を業とし、太仙

湯をひさぎぬ」とある。火災で系図等資料が焼失し、遡りうる最遠の祖として高安理平（正徳五年（一七一五）没）を初代と数え、代々医業を継承してきたようだ。理平は播磨国賀古川城主の息女衣笠種を妻に迎え、長男の丹治（明和六年（一七六九）没）が家を継いで丹山と称した。二代丹山は晩年に瓦町二丁目に転居し、爾来同地に居を構えた。西宮神主の家から養子（三代丹治）を迎えるが、この者は大酒飲みで放蕩を尽したという。以後、直系の後継者がなく、養子に家を存続させる場合が多い。三代丹治は一女二男をもうけたものの、娘は出家し、息子のうち一人は早世、一人は「をるか」（『杏影集』）だったため、摂津国藤野田村の医師杉野伝之丞の嫡男を養子に迎え、妻の妹に娶せた。後に丹山（四代。文化二年（一八〇五）没）と称し、年寄役を勤めるなど信任の厚かったことを窺わせる人物である。四代丹山には子がなく、備前国岡山の医師伊嶋良順の子を養子とし家を継がせた。

この五代常山（天保七年（一八三六）没）は外科医で、年寄役を勤めた後、晩年は隠居して松堂と号した。彼の長男が早世したため、次男の杏山（安政三年（一八五六）没）が跡を襲い、外科及び眼科の専門医として活躍、十三年に亘って年寄役を勤めた。杏山にも子がなく、親交のあった儒者香川琴橋（嘉永二年（一八四九）没）の四男季四郎を養子にした。これが月郊の父道純である。六代杏山は「詩と茶とを嗜み、朝より茶を喫して、詩を語るを楽とし」（『杏影集』）て暮らし、弘化三年（一八四六）刊の『金城集』には三首の漢詩が収録されているという。本業の他に広い教養をもち、同時代の文人と交流のあったことは父の常山譲りであったようだ。たとえば大坂の儒者で漢詩人の篠崎小竹（天明元

年（一七八一）〜嘉永四年（一八五一））は養父篠崎三島の開いた家塾・梅花塾を継いで多くの門人を抱え、当地における教育普及に努めたが、この篠崎小竹と高安常山の交流関係が、梅花塾の入門者名簿「輔仁姓名録」<sup>5</sup>から推察される。篠崎小竹の下に集まった門人は緒方洪庵、斎藤有策、原左一郎（老柳）など当地の医師からの紹介者が多く、高安家に所縁と思しい者も名を列ねている。

題簽に「文化丙子至天保辛卯／十有六年」と記された『輔仁姓名録』を入門順に見ると、文政五年（一八二二）七月二十八日に「源次」（姓は記載なし）なる人物が入門しており、京都木津出身で「高安刑部養子」とある。中野操は『医家名鑑』の中で、高安刑部が後に常山と改名したと推測している。とすれば「源次」は常山の養子ということになるか。また、文政八年（一八二五）には五月八日に高安豊次郎、九月二十二日に高安純太の二人が門を敲いている。前者は瓦町出身で「医家次子 其親介」（「介」は紹介者の印）とあり、豊次郎の親という瓦町の「高安」なる医師が常山だとすれば、豊次郎は杏山を示すことになる。また後者は「常山長子」とある。ただし『杏影集』には早世した常山の長男は齋之助とあり、次節で紹介する系図中にも杏山の幼名や本名などは記されていない。ここでは仮説の一端を示すにとどめるが、後述するように、杏山に養子入りした道純も篠崎小竹門下の篠崎訥堂（竹陰。安政五年（一八五八）没）に学んでいたと思しく、<sup>6</sup>高安家の人々が梅花塾の塾生だった可能性は高い。

月郊の父道純が香川家から高安家に入った経緯について述べる前に、次節では、高安家所蔵の未紹介資料に拠りながら、高安理

平から杏山に至る系譜を補完したい。

### 三 高安家蔵『系図書及御先祖戒名』

今回の調査にあたって、高安彰氏のご令息である高安進氏のご厚意に与り、前掲「高安家について」執筆時に参照されたと思しい系図を参観する機会を得た。縦二十四糶×横十七糶、墨付十四丁の仮綴本で、幾度か紙を継ぎ、綴じ直した形跡が見える。表紙に『系図書及御先祖戒名』の外題、裏表紙には「明治卅九年十二月／高安季子」とある。季子は月郊の妹で、京都の大学で看護学を修めた後、高安病院に看護婦として勤務していた。これは高安吸江が前掲記事で述べた「杏山翁自筆の系図書並に過去帳」の写本と思われ、成立の時期を考えれば、明治三十九年十一月十一日の道純逝去を受けて筆写されたものだろう。見返しに「推定」として二代丹山の妻及び妻に関する鉛筆の書入れが七行記されている。以下本文中にも随所に後代のもと思しい書入れが散見するが、ここでは基本的に季子の筆写部分のみとりあげる。

全体の内容は大きく三部に分かれており、まず高安理平から杏山に至る代々の略伝、次いで理平以後の血縁者の戒名一覧、最後に香川家の系図が記されている。最終丁の後に二ツ折の便箋が一枚挿んであり、これは高安病院設立時の覚書のようなものである。

また高安家にはもう一冊の「系図」が伝わっている。縦二十四糶×横十六・四糶、墨付十二丁の仮綴本。表紙には「高安家系図及香川家系図」という外題に並んで「明治四十一年春写 道成／季子」とある。内容は前半が高安家、後半が香川家の系図で、前

半部は『杏影集』と一致する文章が多い。道純の三回忌（明治四十一年秋）に備えて整理された写本と思しいが、月郊による『杏影集』編纂作業の副産物として生れたものか。あるいはこの系図を基に月郊は『杏影集』を編んだのかもしれない。後半部の「香川家系図」は「系図書及御先祖戒名」と同様である。なお『高安家系図及香川家系図』にも後代のもものと見られる書入れがある。本稿では『系図書及御先祖戒名』を一部翻刻・紹介する。底本の体裁を能う限り再現するよう努めたが、底本の改行には従わなかった。また字間のアキ部分は基本的に一字アキに統一した。

一丁表から四丁裏まで、高安理平を「中興初代」とする代々の当主について記述がある。

#### 中興初代

#### 高安理平 針術導引

正徳五年乙未十二月廿一日没す

妻は衣笠種延享四年丁卯十月廿一日没す

男女六人あり

男子二人 丹治郎 萬三郎 丹治郎改名二代丹治ナリ

女子四人 萬三郎をはじめ女子悉く早逝

大阪天満住居なり 理平死後隣家より出火にて丸焼二相成其上小兒多く且つ女之事ゆへ系図切端悉く焼失と聞傳ふ故二賣葉太仙湯ハ理平か相初候か夫より已前よりこゝ賣始めたるか不明なり後瓦町通り三丁め百貫町二住居なり

#### 二代丹湊山 針術導引

明和六年十二月廿七日没す

妻ハ撰津御手村百姓より娶る女子二人あり 妻の里四代丹山の時に断絶 丹治隠居後に丹山と改名高麗橋壺丁目二隠居す 此時隠居と本宅と家二軒に分る 然る處 三代丹治死去ニ付元之本宅百貫町に立帰る 後瓦町二丁目住居なり

三代丹治 針術導引<sup>二七</sup>

明和六年三月十七日没す

此人西宮神主より養子に来る姓名不分明大酒放蕩者之由 妻ハ丹治より先に没す 但し子三人出生

男子二人 女子一人

男子一人ハ早逝 一人ハ鈍物ニ付小児の時土産附不通にて河内瀬木村百姓に遣す成人之後弥鈍物ニ付大祖母以隣折ニ寄せ遣す勿篇此人先年没す女子ハ尼ニなり蓮航と号し京都尼寺圓通寺に修行に來り其後帰宅文化八年六月廿四日没す<sup>二八</sup>

四代丹山 <sup>三四</sup>年寄役取締 本道針術導引

文化二年乙丑十月廿九日没す

撰津藤野田村醫師杉野傳之丞倅なり

三代丹治死後丹治妻之妹ニ養子に来る

實家杉野ハ丹山存命中死ニ絶家名相続可致者無之杏山母之女名前に致候處行ニハ實家ニ隠居之積りなり但し杉野家ハ圓満寺と云ふ門徒寺之向ひにて大宅大破損に付無抛五代常山之時家地面等賣拂此方ニ引取る宗旨ハ代々西門徒谷町信樂寺檀那なり今以て盆正月相勤佛事等回り候<sup>三〇</sup>得ず營ミ來り有之常山倅杏山ニ弟か又ハ妹にても有之

候得ば右杉野家名断絶致候之あるゆへ相立度と亡父常山兼て存心ニ候得共何分杏山老人故不得其意候事なり

五代常山 <sup>五五</sup>年寄役相勤 本道外科

天保七年丙申正月十五日没ス

備前岡山医師下内田町伊嶋良順倅大阪道修町壺丁目天野屋九兵衛此人備中より養子に来る常山國元之回縁に付遠方ゆへ親本として此方に養子ニ來り隠居後に改名松堂但し天野屋九兵衛ハ天野屋理<sup>三〇</sup>兵衛之筋道修町壺丁目養家と聞傳ふ右九兵衛五十年新町内年寄役相勤先達手公儀賜褒美 死後零落近頃町内ニ名前等無之由先年金銀出入且ハ九兵衛娘養子一件ニ付常山存命中相互ニ儀絶なり當時天野屋ハ此方ト血脉無之候事常山實家備前之國伊嶋ハ今以て不相變往來有之事且養父丹山ニ女子二人あり常山初姉ニ養子ニ來り男女二人出生早逝妻も又没し右ゆへ丹山存命中妹後妻ニ成る則ち杏山母なり男女子五人あり悉く<sup>三一</sup>早逝嫡子杏山一人相殘る

六代杏山 <sup>五三</sup>年寄役相勤 本道外科眼科

常山實子也妻撰津奈良村庄屋奈良且右衛門妹相娶る

中興初代正徳五年より当亥嘉永四年迄

百三十七年ニ相成る

但し備前常山実家伊嶋氏ニ亡父常山之姉あり同國金岡實商賣播摩屋三郎兵衛方ニ嫁し付て亡父常山より長寿し六七年前ニ没す之ハ今ニ懇意往來あり回縁や其外奈良村奈良且右衛門妹ハ撰津鳥飼西ノ村庄屋中小<sup>四〇</sup>路善三郎妻なり其妹ハ則杏山妻 杏山妻之妹ハ撰津中島郡小松村

松野源左衛門分家庄屋松野勘左エ門倅ノ妻當時往来回縁  
ハ是斗なり

其鈞已然ハ当地祖父丹山實家之親類上町明石屋弥兵衛と  
云ふ町年寄相勤め候亡父常山代ニ断絶す其外親類と云ふ  
家ハ無之事

香山識

宗旨ハ代々禪宗中寺町禪林寺檀那也同之

四丁表の記述によると、系図の原本は嘉永四年（一八五二）の  
成立とみてよさそうだ。嘉永四年といえ、次節で述べるように  
道純が高安家に養子入りする年であり、一つの区切りとして六代  
香山が認めたものと思われる。系図は香山から道純の手を経て月  
郊らの世代に渡り、季子は香山の筆になる原本から『系図書及御  
先祖戒名』を写したのだろう。内容はほぼ『杏影集』と近似する  
が、ところどころ『杏影集』にない記述も散見する（三代丹治は  
二代丹山より早い明和六年三月に没したため、別宅に隠居してい  
た二代丹山が本宅へ帰っていること、四代丹山の養子入りも三代  
丹治の死後であること、など）。また『系図書及御先祖戒名』に  
は各代の当主の妻やその親類との関係に至るまで詳述されてい  
る。ただし、五代常山の子に関する記述の曖昧さなど、前述した  
篠崎小竹の門人問題も含めて今後の調査を要する。

この後、五丁表から十一丁裏まで初代以降の当主及び家族、親  
類縁者の戒名と俗名、没年月日等が並ぶ。たとえば五丁表は、

高安氏中興初代 俗称利平

釋源伯信士 光近丹山之父也

正徳五乙未年十二月廿一日没

釋妙源信女 衣笠於種

延享四丁卯年十月廿一日没 源伯之妻也 七十九歳

二代 靈社開基

丹山玄鳳禪定門 幼名丹治郎

明和六巳丑年十二月十七日没 利平之嫡子 六十二歳

淳厚惠恩大姉 俗名富

享和二年壬戌五月六日没 玄鳳之妻也 七十五歳

といつた具合である。十一丁裏の末尾を見ると、

淨雲院普透月郊居士道純次男 高安三郎 七十六歳

昭和十九年二月二十六日永眠

とあり、その間にも様々筆跡が変わっていることに鑑みれば、時  
代が下る中で書き継がれ、更新されてきたに違いない。鉛筆によ  
る書入れも、さらに後代の人々による補足と思われる。先の吸江  
の指摘（「抑是録【一】」前出）も併せ、今後『杏影集』や『高安  
家系図及香川家系図』を補完的に参照し、検討すべきだろう。

#### 四 香川琴橋と高安道純

十二丁表から十四丁裏まで「香川家系図」が続く。道純の実父  
で月郊の祖父にあたる香川琴橋は、高安香山と親しく、香山の元  
へ四男の季四郎（道純）を養子に出したことで、香川家と高安家  
の関係が生まれた。琴橋は、安芸国の北川家の嫡男だったが、浪  
人となり大坂へ流れ、香川子硯の養子となる。月郊が「私の真の  
系統をたどると、安芸の藩士、北川正方が曾祖父になる」（明治  
大正時代を経て）前出、三八四〜三八五頁）云々と述べるのはこ

のためである。月郊の「真の系統」とはいかなる血脈なのか。以下『系圖書及御先祖戒名』から「香川家系図」を引く。

香川家系図

藝州佐東郡八木邨城主

香川左衛門尉光景孫

信景 讃州香川郡雨霧城主

香川中務大輔

天正七年己卯二月與長曾我部元親戦後戦死有之(十一)

景行 信景男

藝州住戸谷村左衛門大夫

中興祖

昌範 景行男

藝州香川久左衛門遊見ト號ス

妻 何ヨリ来タカ滅ラ不分子二人アリ

昌道 香川久左エ門

昌範男(十一)

妻 コレモ絶テ不分子二人アリ

忠道 香川久左エ門

昌道男

妻 吉田忠左エ門ヨリ来ル

子六人アリ女子二人嫁男子三人早世

忠侯 香川金左衛門忠道三男

喜楽齊ト号ス

安永四乙未年家族ヲヒキイテ浪華ニ移ル(十二)

妻 藤田直平ヨリ来リ子六人

昌福 香川清次郎

子硯ト號ス

初鈴木喜助ニ客居シ已娘配偶ニテ養子ノ積ノ処不縁ニナリ

退テ香川家相續スルナリ

妻 後改テ鈴木ヨリ嫁来ル

景徹 香川一郎琴橋ト号ス

藝州家臣北川正方嫡男(十三)ナリ浪人ノ後浪華ニ来リ

香川家ノ養子トナル外実弟白川ト申者アレド今十ヶ年

義絶ト相成

妻 高槻旧農家

高井治兵衛ヨリ来ル

凡中興ヨリ二百四五十年トナル

子七人アリ

景昶 香川一郎

昌範ヨリ當代迄凡二百年ニ来ル(十四)

妻ツル 八幡 山城ヨリ来(南村中田氏)

離別シテ内本姓ヲ名乗ル昭和廿年一月五日没 八十歳

長男敬一 妻久

次男謹之助 妻初枝

三男季三郎 教養道寛居士 明和五年五月十二日永眠

六十四才蟠竜寺

二女君子 滋養修一ヲ迎ヘテ

養子トス 明和十四年土岐美江子ヲ養女トス

妻なを 正行院妙戒日直信女 昭和十九年

遺言ニヨリ久本寺に葬ル 六月六日永眠

芸州の香川家といえは、近世歌壇に重要な地歩を占める香川景樹(明和五年(一七六八) - 天保十四年(一八四三))を養子に迎えた京都香川家は岩国本家の流れを汲む<sup>9)</sup>。遠祖を遡れば同じ血脈に行き着くのであろうが、ほぼ同時代を生きた香川景樹と子硯や琴橋らに直接の交渉はなかったともいわれる<sup>10)</sup>。

中興の祖を香川昌範とする当香川家の代々だが、系図にもあるように昌範から数えて五代目の昌福が「服部古硯の書風を襲て子弟を教育し、又飛鳥井家の門下で蹴鞠に巧で、舎楽齋と號して茶に遊んだ子硯先生のこと」(高安吸江「二つの日記から」『杏陰会誌』第三号、昭和五年十一月)で、彼の元に養子に入ったのが、月郊父方の祖父、香川琴橋こと景徽である。

琴橋名は景徽、通称一郎、安芸の藩士北川正方の長男なり故ありて流浪の身となり、大阪に來りて、香川子硯の養子となりぬ。子硯は服部古硯の筆意を受け復古堂と稱し、書と儒とを以て世に立つ者、実子ありしも橋に其業を継がしめぬ。橋性剛毅、富豪権貴にも屈せず、高麗橋に住み、浪華名勝帖、琴橋漁唱、遊鄙紀行等を著しぬ。名勝帖は其没後版成りしが、其他は家に蔵するのみ。(…)嘉永二年十月五十六歳にしてみまかりぬ。妻光、高槻旧農家高井治兵衛の娘七子あり。長男一郎麗橋と号し、家を継ぎぬ。三男與三郎、小桐と号し、才ありしも、命薄く、家を出で、行く所を知らず。季四郎は天保八年十月二十五日今橋に生まれぬ。始漢学を修め、菱浦と号しき。十三歳父を喪ひ、十五歳香山の養子となり、医学びぬ。(…)『杏影集』前出)

琴橋は同時代人として頼山陽、大塩平八郎、篠崎小竹らと交流があった。頼山陽自刻の印を贈られたり<sup>11)</sup>、大塩平八郎が叛乱を起した際には、真偽のほどは定かでないが、暇乞いに来た大塩を横堀まで見送ったという逸話さえあるらしい<sup>12)</sup>。また大阪市北区西寺町(現・野崎町)の蟠龍寺にある琴橋の墓には篠崎小竹による碑文が刻まれ、その交誼の深さが窺い知れよう。

琴橋香川先生之墓 先生諱徽、字公琴、称一郎、芸州人、北川氏、幼従父五介君來大阪、為通家香川子硯翁所養、以善書繼翁業、從琴溪劉翁、名声稍振、徒弟滿塾、阪城加番倉橋侯、東町奉行戸塚君、皆延教授其郎君、嘉永二年己酉十月十八日病歿、年五十六、葬天満蟠龍寺、妻高井氏、生四男三女、長子昶嗣焉書

碑文には、琴橋は幼少時に父に連れられて來坂したとあり、前掲の系図や『杏影集』の(浪人となって大坂へ来た)という記述との齟齬もあるが、琴橋及び香川家の教育者としての一面が看取できる。なお、琴橋の肖像が『杏陰会誌』第三号(前出)に掲載されている。月郊が関東大震災後に大阪へ帰った年、というから大正十二年(一九一三)頃か、香川家を訪ねた折に図らず提示されたものだという。

短かい平たい顔に、や、低い額、真直な眉、細い二重瞼のはつきりした目、太い鼻、や、小さい薄い唇に前歯二見えた口、少し尖つた腮、平たい耳、余り高く無さ相な身に袴を着け、膝に手をついた姿、いかにも謹直な中国人の表現、どこか先考に似かよふ所がある。

(高安三郎「香の煙」『杏陰会誌』第三号、前出)

月郊は祖父の肖像に、亡父道純の面影を見いだしている。月郊らの世代にも、香川家との行き来は絶えず続いていたようだ。では、香川家と高安家はいつから親交をもつようになったのか。この問題については、高安吸江による考証が備わる。

確な記録がないのでわかり兼ねますが、琴橋翁日記（弘化三年元旦（嘉永元年九月十三日））を見ると弘化三丙午年（一八四六）九月廿七日の條に「足甲疼、高安投蒸薬」とありませけれど、同年冬家内に重病人があつた時、浅井高橋二老の来診はあつても高安の名はなく、又見舞にも来て居ない様子を見れば、此時分にはまださまで親密ではなかつたのでしやう（。）しかし翌丁未春になれば時々「訪高安」の記事が見えます。

（二つの日記から）前出）

吸江は「古老の話」として、道純が幼年時に琴橋の使いで高安家へ葉を受け取りに行った際に「その伶俐そうな応対振と愛嬌のある風采とで大に香山夫婦の氣に適ひ、忽ち養子話がもち上つ」（二つの日記から）前出）たと伝える。そして、琴橋が没した二年後の嘉永四年四月八日、高安家に入った。当時の道純の生活について、吸江は道純が十七歳の時に書いた日記——「美濃四ツ切を又二ツ折にした小冊子で、嘉永六年二月九日から四月十六日まで、同年八月十五日から十月八日迄、並に七年八月七日から廿六日まで、墨付十三枚と十四枚との二冊で、何れも菱浦日記と左上端に記されて居」（二つの日記から）前出）るもの——を紹介している。その日記には「膏薬」や「太仙湯」と高安家で製造販売していた薬に関する記述のほかに「香川塾論講」「香川書会」などとあり、兄麗橋が跡を継いだ実家の私塾にも屢々通っていた

ことがわかる。また「篠崎講釈」は篠崎訥堂（竹陰）、「藤澤講釈」は藤澤東咳の泊園書院か。「中西講釈」は未詳。さらに道純の日記には「芝居見物」の記録が散見し、その「生涯を終ふまでの嗜好であつたのは人の知る処」（二つの日記から）前出）だったと吸江は回想する。これらの日記の原本は所在不明で、吸江の論考は資料的価値の高いものといえよう。

『杏影集』によれば、安政三年（一八五六）二月八日に養父香山が五十二歳で没すると、二十歳で直ちに後を継いで七代丹山と称し、後に道純、号を杏陰と改めたという。ただし、緒方洪庵の適塾の門人帳<sup>12</sup>には、香山が死去する七日前の「安政三年丙辰孟春二月一日入門」として「浪華瓦街第二街」の「高安丹山」とあり、香山の死以前にすでに家を継いでいたか、少なくとも七代丹山を名のっていた可能性は高い。

高安家を正式に継いでからの道純の事績については、同時代資料として古尾照治郎『近畿医家列伝』前編（大阪史伝会、明治三十五年一月）に当該時点までの詳細な年譜（ろ四六（ろ五五頁））があり、くり返し紹介してきた『杏影集』や『船場紀要』第七号所載の二編、中山沃『緒方惟準伝』にも詳しいので、月郊の誕生までをごく簡略に記す。

慶應三年（一八六七）十二月、道純は大阪在住常備兵附の御雇医師となり十五人扶持を給される。明治二年（一八六九）には浪華仮病院に出仕し、大阪府医学学校病院に勤務した。この頃、蘭医ポードウインに師事。月郊が生まれたのは明治二年二月十六日、道純は医師として地位を固めていた時期であった。

併せて道純の妻で月郊の母野恵（大正十年（一九二一）二月十

九日没<sup>⑨</sup>）についてもふれておく。その実家は「南朝の遺臣が落ちて来たのが初祖になるといふが、其名も不明、それ以来是といふ人も無かつたが、祖父中小路善三郎は鷹揚で、細事に頓着せず〔…〕いかにも一村の長らしい人と見える」（『香の煙』前出）と月郊は記している。また吸江は、先に紹介した道純の日記を典拠に、野恵が嘉永七年（一八五四）春頃に入嫁したと推定する（二つの日記から）前出。道純同様、野恵も非常に芝居好きで、月郊は母に連れられて「物心を覚えぬ頃から」劇場に通つたことが「後に劇を作る根になつた」（『高安乃里』前出、九頁）という。高安家には「いつも役者が出入りしていた」（『近代文学研究叢書』第五十三卷、昭和女子大学近代文化研究所、昭和五十七年八月、平井法執筆、一七四―一七五頁）というから、両親ともに劇を好む家庭環境が幼い月郊に及ぼした影響は小さくない。

## 五 月郊と高安病院

月郊が七歳の頃、一家は瓦町から淡路町へ移つた（『高安乃里』前出、五―六頁）。

私の記憶は淡路町の家から始まる、心齋橋筋と井池の中段南側で、奥行の深い家であつた。外に面して玄關と葉局、其上は塾、小庭を隔て、診察室、それも唯の座敷に椅子、寝台など置いてあつた。〔…〕其頃父は府立病院に勤めてゐて、内でも甚忙しかつた。塾にはいつも七八人から十人以上も居たが、丁度漢学塾の様に師弟の關係で、敬礼もあり、情もあつたものである。（『杏と桂』『杏陰会誌』第二号、前出）

その家の二階に病身の父方の祖母こまが起居しており、月郊は読本や稗史小説などの読み聞かせをせがんだという幼年時の挿話を屢々書いている。月郊はこの祖母によく懐き、夏になると蔵書の虫干しが彼の仕事となつた。

日本の科学史では重要であつた、気海觀瀾、舍密開宗、解体新書、和蘭字彙など並べてはまた竹外二十八字詩、星巖集、山陽詩抄、梅墩詩抄、遠思樓詩集など開いて見る、これは祖父（『杏山』）の遺書で、詩と茶は其嗜好であつた。茶器は多年の後まで存在すら知らなかつたが、詩は其頃から目に入つて、暗誦したり、絶句位作つてたりした。私の詩味は祖父父母の影響もあつたのである。（『杏と桂』前出）

明治十四年（一八八一）三月には、道純が道修町に診療所・杏陰堂（後に道成がここに高安病院を新築）を開き、同地へ転居。父の東京土産である浮世絵や役者絵に心誘われ、十一、二歳頃から東京に憧憬を抱きはじめた月郊が上京を許されるのは、この年の秋である。深川佐賀町に寄寓して本郷円山のドイツ語学校に通い、当初は家業を継ぐべく勉学に励んでいた。しかし、自由民権運動の影響を受けた月郊は明治二十年代初めのある年、父に「医者になるのを止める」と伝える。道純は顔色を変えた。

嫡男が医者をやらぬとは、其失望と困却はどれ丈であつたか、其頃の私には想像は出来なかつた。しかも直接に膝詰に見せたので、叱る訳にもゆかず、『それでは何をやる』と云ふと、『政治家を』と云つたには更に困つた、しかも何になるかといふと『総理大臣になります』と云つたにはあきれたであらう。父は親戚に計ると、某氏は丁度其頃から医政を兼ねた後

藤新平氏を例にして、裁判医学にしては如何と調和策を出した、しかし一図に集注する私は是非一筋をと主張した、他の親戚も再考を求めた、在塾の某氏も賛成しなかつた、しかし私は何も聞入れず、全然許可をえるまも待たずに東上した。

〔杏と桂〕前出)

嫡男の彷徨を横目に、明治二十三年三月九日、道修町の杏陰堂に加えて、道純は土佐堀に私立病院、高安病院を新設する。その年の十一月に月郊は妹季子の同級生、吾妻と結婚<sup>22</sup>。文学に志を転じて明治二十四年九月には東京内幸町に寓居し、小説『天無情』を私家版として処女出版した。冬には大阪へ戻り、翌二十五年に長女ゆり子が生まれている。月郊は以後も雑誌への寄稿や詩集の自費出版を続け、いよいよ父の不興は募る。明治二十七年には次女美子が生まれたものの、しだいに実家での居場所を失った月郊は、その年に廢嫡を申し出、京都に閑居し、自身の心の赴くまま文学の道へと歩を進めるのだった。

しかし、である。月郊の著作は大正期に至るまで自費出版の形で公刊されたものが多い点に注意したい。その生涯を追っても月郊は定職に就いている様子がない。明治三十年代後半には同志社などで教鞭を執っているが大きな収入だったとは思えない。月郊は古美術品や和漢の古書蒐集を趣味に風雅な暮らしを謳歌していたようだし、そのうえ出版費用をどのように工面したのか。

その頃〔明治三十四年頃〕私の力で月に十円と収入はなかつた。一冊の本を買ふには十冊の旧蔵を売つてゐた。それでも流行を追うて金になり相な文をつゝるのは自身が許さず、どこまでも自分一流の詩、劇、小説を書いて、苦しい算段して

自費で出してゐた。〔高安乃里〕前出、二六五―二六六頁）収入は少なく、蔵書の切り売りにも限界があるろう。この時分の月郊の暮らしぶりを、徳富蘆花がこんなふうを描いている。

同じ三本木に住むT君を訪ねた。T君は文壇先覚の一人である。逸早く泰西文学を咀嚼し、生活の余裕あるまに、気の向くまま詩を作り、小説を書き、劇を草し、時々凝つた装釘の自費出版を出して居る。〔…〕熊次の眼に触れたT君の作品は、確に新しいものがあつた。然し世評の如く、生硬で都合点に墮ちる憾はあつた。それは書齋の産物と云へば云はるるものであつた。然し世評に頓着なく、悠々自ら楽しみつつわが行く道を行くT君の生活振りを、熊次は羨んだものであつた。〔説小富士〕第三卷、福永書店、昭和二年一月）

「T君」が高安月郊である。蘆花の文章に対して、月郊は「楽しむどころでなく、血縁すら深刻な葛藤を結ぶ人生に超越すべく余儀なくされた」（『高安乃里』前出、二六六頁）と異を唱えているが、少なくとも蘆花の目には「生活の余裕あるまに」「世評に頓着なく、悠々自ら楽しみつつわが行く道を行く」様に見えるのである。いずれにせよ、そんな生活を可能にしたのは、平井法が「父によつて廢嫡されたとはいへ、しばしば彼のもとを訪れていたという母を通じて、実家からの援助の手が差し延べられていたためであつたと思われる」（『近代文学研究叢書』第五十三卷、前出、一八〇頁）と指摘するように、高安病院とのつながりにあつたのだろう。月郊の経済的背景もまた、看過できぬ検討課題の一つである。

注

(1) 三島佑一『船場道修町 葉・商い・学の町』(和泉書院、平成十八年一月)にも高安病院の挿話が紹介されている。

(2) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第五十三卷(昭和女子大学近代文化研究所、昭和五十七年五月、平井法執筆、一七四頁)に拠る。原誌は『復刻版 文庫』(不二出版、平成十九年十二月)で確認した。

(3) 山口玲子『女優貞奴』(新潮社、昭和五十七年八月、一八六頁)に、高安病院で音二郎が手術を受けた記述がある。音二郎の死去前後の新聞各紙は、高安病院での手術・入院、同院から帝国座へ運ばれ臨終を迎えた経緯を報じている。

(4) 高安道純の死去当日を回想した高安季子「思ひ出多き父の死と私の信仰」(『杏陰会誌』第三号、昭和五年十一月)に「五人兄弟の内、長兄(月郊)は京都に弟(吸江)は独逸にあつて、夢にもこのやうな事は考へては居られまい」と、高安家蔵の高安吸江年譜(執筆者不明、便箋三枚、ペン書き)に「明治三十七年より全四十二年まで独逸留学」とある。中川沃「緒方惟準伝——緒方家の人々とその周辺——」(思文閣出版、平成二十四年三月、七一六頁)も参照されたい。

(5) 多治比郁夫校注「篠崎小竹門人帳」(宗政五十緒・多治比郁夫編『上方藝文叢刊5 名家門人録集』)所収、上方藝文叢刊刊行会、昭和五十六年十一月)。

(6) 管宗次「浪華風流月旦評名橋長短録 嘉永六新板一暮末期浪華文人見立番付一」(『京大坂の文人一暮末 明治一』)所収、和泉書院、平成三年七月)を参照した。

(7)

『杏影集』に「五子季子京都大学医院に看護術を学び来りてこれ(道成)を助く」とある。また高安彰「高安家について」(『船場紀要』第七号、昭和五十三年二月)には「季子は夫運には恵まれなかったが京都大学で産婆及び看護学を学び高安病院の看護婦長として兄弟を助けた」とある。

(8) 今般病院設立候ニ附而は當診察所ニ在テモ右病院規則可成相用ひ候様致度儀ニ付来ル二月一日より諸医員薬局生雇員及ヒ車夫ニ至ル迄更ニ月給ヲ増加シテ日々之食事ハ自弁たべく候間其旨了知し若シ違背致候輩ハ無用捨相断上申此段及報告候也

明治二十三年一月廿九日

杏陰堂主<sup>㊦</sup>

右之趣承知之者名検印之上返戻可致候事

但シ各辨當ヲ用ヒ自宅ニ帰り御食事スルヲ許サス

岡田<sup>㊦</sup>

長尾<sup>㊦</sup>

有永<sup>㊦</sup>

三藤<sup>㊦</sup>

中小路<sup>㊦</sup>

水谷<sup>㊦</sup>

森<sup>㊦</sup>

山本<sup>㊦</sup>

山内<sup>㊦</sup>

伊藤<sup>㊦</sup>

(9) 神作研一『近世和歌史の研究』(角川学芸出版、平成二十年一月)を参照した。

(10) 高安月郊「明治大正時代を経て」(『東西文芸評伝』)所収、春陽堂、昭和四年六月、三八五頁)、高安三郎「香の煙」(『杏陰会誌』第三号、昭和五年十一月)を参照した。

(11) 高安三郎「香の煙」(註10掲出)に印影が掲載。

(12) 高安月郊「明治大正時代を経て」(註10掲出、三八五頁)。

(13) 鎌田春雄『近畿墓跡考 大阪の部』(大鏡閣、大正十一年七月、一二一〜一二二頁)、石田誠太郎『大阪人物誌』卷二(石田文庫、大正十五年十一月、一一〇〜一一二頁)などを参照した。中川沃『緒方惟準伝』(註4掲出)は後者に拠って琴橋の略歴を記している。

(14) 管宗次「浪華風流月旦評名橋長短録」(註7掲出)に拠る。なお中川沃『緒方惟準伝』(註4掲出)は「漢学を、実家の香川塾および藤沢東咳、同南岳、篠崎小竹、広瀬旭莊に学ぶ」(七一三頁)と述べるが、篠崎小竹は嘉永四年に没しており、弟子で後継の篠崎訥堂(竹陰)門下だったと思しい。

(15) 中川沃『緒方惟準伝』(註4掲出)も高安吸江の論考を参照している。

(16) 『系図書及御先祖戒名』六丁表に「六代杏山三仙居士/安政三年丙辰二月八日 常山嫡男五十二歳」とある。

(17) 緒方富雄編著『緒方洪庵 適々齋塾 姓名録』(学校教育研究所、昭和四十二年一月、九〇頁)。

(18) 中川沃『緒方惟準伝』(註4掲出)も門人録を典拠に道純の適塾入門日と丹山の署名について指摘している。ただし香山の没年月日は記されておらず、丹山を名のるタイムニングについてはふれられていない。

(19) 『系図書及御先祖戒名』十一丁表に戒名と没年あり。中川沃『緒方惟準伝』(註4掲出)は墓碑銘から生没年を確認。

(20) 「私の母方は南朝の遺臣、戦敗れて摂津鳥飼に隠れたものである。祖父は里正を勤めたとやら、これも不明」(明治大

正時代を経て」註10掲出、三八五頁)。

(21) 中林良雄「西洋文学受容者としての高安月郊——西洋文学受容史のために(九)」(川戸道昭・榊原貴教編『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》47 イブセン集』所収、大空社、平成十年五月)を参照した。

(22) 吾妻については、月郊が編纂した小冊子『吾妻』(私家版、昭和十一年)に詳しい。

(23) 引用は『徳富蘆花集』第十九卷(日本図書センター、平成十一年二月、一一四〜一一五頁)に拠る。

〔付記〕 本稿の執筆に際し、昭和女子大学の平井法教授より高安月郊のご遺族に関するご教示を賜り、高安進氏から貴重な諸資料の閲覧・紹介をお許しいただいた。両氏に深く感謝申し上げます。また『系図書及御先祖戒名』の翻刻にあたって稲葉有祐氏よりご助言を賜った。記して謝意を表す。

(こ)とうりゆうき 川村学園女子大学非常勤講師